

しずおか平和の風

No.16
2016年8月25日
発行
静岡市
平和委員会
静岡市葵区鷹匠
1-5-8
TEL 253-1854
FAX 252-0785
メール
Peace-City
@mail.707.to

日中友好の旅に 参加して

合戸 政治

日中友好協会静岡支部から、満洲への「日中友好平和の旅」のパンフが送られてきた。すぐ参加を決意した。中国、とりわけ満洲には、昨年来関心をもっていた。それは、満洲に関連した映画「望郷の鐘」と「15歳の夏」という二つの映画会の実行委員をやったことからだ。「望郷の鐘」は、満蒙開拓団と残留孤児の悲劇、「15歳の夏」は、国策に翻弄された若い命を通して、民族の誇りや民族を越えた真の友好をテーマとしたそれぞれ素晴らしい映画だった。

満洲の地を踏んで、見るもの聞くものとても印象深く、日本人としてつらい思いもしたが、参加して良かったと思った。

満洲国北辺の軍事基地ハイラル、日本軍とソ連軍が激突したノモンハン、731部隊があったハルビン、満洲事変の発端である柳条湖（記念館）、そして、撫順の平頂山惨案記念館と戦犯管理所など、日本人として忘れてはならない満洲侵略の歴史ポイントが含まれていた。

ハイラルの「反ファシズム戦争ハイラル記念園博物館」に入ると、いきなり、「勿忘1931 1945」という記念碑が目の前にあった。ギョツとした。外には高射砲や戦車の実物、そして歩兵のフィギュアが並べられており、「解放戦争」をイメージしている。愛国教育の拠点だとされているようだ。誰かが言った。「ここは日本という靖国神社なんだ！」靖国神社とは比較にならないが、間違ったらそのようになる危険も無いわけではないと思った。

日本軍第23師団司令部（現在ハイラル市庁舎）の横に、かつてのハイラル神社の「手水」が残っていたが、その柱に「日本侵○ 勿忘国恥」という落書きがあった。「侵」の後は読めない字だったが意味は分かる。

今中国で行われている愛国

教育とは何なのか？ 日本と中国の真の友好の在り方はどうあるべきだろうか？

平頂山惨案記念館では、周学良館長がわざわざ出迎えてくださり、懇談の機会を得た。その時の館長の言葉「歴史を忘れないということは、恨みを忘れないということではなく、歴史からくみ取ったものを将来の中国と日本の友好につなげることです。ここで見たことを日本の人たちに伝えて欲しい」が忘れられない。「不

忘歴史 面向未来」というところか。日本軍は平頂山で村民老若男女、子どもも含めた3000人を虐殺した。折り重なった死体の川の上に、それをそのまま残して建てられた記念館の館長だけにその言葉の重みを噛みしめた。

日中友好はどうあるべきかを考えさせられた旅だった。



↑反ファシズム戦争ハイラル記念園博物館入り口のモニュメント

（この記事では、満洲でなく洲という字を使っているが、そもそも「満洲」はマンジウ族の歴史的な居住空間を指す言葉である。マンジウ族の王朝である清は、マンジウという音にむりやり漢字を当てはめた。「清」にサンズイがつく「清」が「満洲」となった。）

米中合同軍事演習



『RECORD CHINA』に以下の記事が載っていた。

「2016年6月20日、米海軍主催の環太平洋合同軍事演習「リムパック2016」に参加するため浙江省舟山の軍港を出航した中国海軍艦隊5隻が米グアム島付近の西太平洋海域で米海軍艦隊と合流、ハワイの真珠湾へ向かった。その間、米中艦隊は隊形変化、通信、海上補給、緊急措置、主砲対海射撃、海賊対策、潜水艦支援などの共同訓練を行なう」

これは、南シナ海で「航行の自由作戦」などを展開している米海軍が、中国海軍と不測の事態によって軍事衝突することを回避するためだそうだ。アメリカと中国は、経済的にも深く依存し合っており、互いにコトをかまえる気はない。緊張が高まっているからこそ、衝突を防ぐための危機管理体制づくりを急がなければならない、というのが両国の共通認識らしい。

「仮に襲いかかってきそうな隣人がいるとしても、賢く制御し、決定的衝突にならないようにしていくという話は一切ない」（赤旗日曜版）という寺島実郎さん（日本総合研究所理事長）の言葉を思い出した。安倍政権の中国政策を批判した言葉であることは言うまでもない。（合戸 政治）



日中平和友好の旅に行ってきた。旅の中で、今も鮮明に脳裡に残っている場所の一つは、撫順炭鉱と平頂山虐殺事件の現場です。本多勝一氏の本で承知はしていましたが、今回、その現場を訪ねて改めて当時の日本軍の残酷な行為に怒りと悲しみが沸き起こりました。遼寧民衆自衛軍が日本軍を攻撃することを知らせなかったことを理由に、平頂山の村人、老若男女（3000名とも言われる）が集められ、虐殺。その遺体にごソリンをかけて焼却。さらに山を爆破して埋めた。それが今、掘り起こされ、白骨化している。が当時のままの姿で展示されている。虐殺された遺体の山が累累と。中には、子どもの命を救わんとした母親や父親が子どもの上に覆いかぶさった姿もあり、参加者一同声も出さずただただ見つめるばかりでした。私自身、静岡空襲の時、何度か父母が私たち子どもにも覆いかぶさってくれたこととたびたび、涙なしには見る事ができませんでした。今も、中東やアフリカで戦争の狂気が荒れ狂い、多くの市民やなかならず子どもの命が脅かされています。

日本の現状も、危なさを増しています。日中間はもとより、世界中が「戦争ノ」。「トランプは話し合い（外交）で」の声を大きく、強く訴えていきたいです。また若い方々にこのような歴史が70年以前の時代にあったことを知らせ、伝えていきたいです。（足久保在住） 新村直樹

学徒動員の思い出

中島 静

戦況がかんばしからず、20年6月5日から母校の体育館を工場として出発することに決定、いよいよ明日は帰校というところになりましたが、その夜6時頃突如、話があるから某所に来ようという呼び出しでした。直ちに行動してみると、工廠長・海軍中将と他に副官将校2人がおられ、「明日学校へ帰す予定でしたが、都合がよろしくないことです。早く承知してほしいです。」との事で大変驚きました。私は「学校ですべてに父兄と連絡をとり歓迎の準備が完了している

見付高女の動員 —生徒を帰らせた校長

見付高等女学校の動員 (現・磐田北高等学校) —同校の創立100周年記念誌より—

学年生(動員時)	人数	動員先	校舎転用	死亡者
4年生	150名前	専売公社見付工場 日本形染 豊川海軍工廠	豊川海軍工廠 の学校工場と なる(旋盤)	挺身隊員 1名爆死
3年生	150名	東海精機		
卒業生	40名	一部は製塩 女子挺身隊豊川工廠		

私ども百余名は必勝のハチマキもりりしく豊川工廠へと向かったのがございました。磐田駅頭には近隣の各学校数百人の動員学徒、教師、在校生と見送りの父兄であふれておりました。私は今こうして目を閉じますと、60数年を経ましたあの日の状況がはっきりと浮かんで参ります。

当時の岩城校長先生は
十七の花の乙女戦にゆく
かよわき手に作る砲弾は
鬼畜米英の脳天を砕く・・・
ああ、栄ある業へ
いざ征け高鳴る胸を張りて
と壯行のお言葉をくださいました。
— 須山 和子 (見付高女35回)

学校名	豊川海軍工廠での戦没者	各校の記念誌より抜粋
伊東高女	井原寛子 兵器部 海軍軍属 杉本幸子 兵器部 海軍軍属	あの日、私を壕へ誘ってくれた友は数分後、壕への至近弾により19歳の生命を散らした。
誠信高女	柳瀬和代 昭和20年 3月28日、職場で卒業式。 被爆時の身分は女子挺身隊が海軍軍属。	大空襲の時、同級生のほとんどは、その少し前に本宮山の麓の『ちぎり』という所に疎開していたので危うく難を免れた。ただ一人、工廠本部に居残った柳瀬和代さんが不幸にもその犠牲になった。
気賀高女	山下千代子 18歳 海軍軍属 鈴木葉子 18歳 海軍軍属 小山ちよ子 18歳 海軍軍属 金子花枝 18歳 海軍軍属	昭和20年 9月18日 豊川海軍工廠戦死 4 学徒の報国隊葬 (講堂にて)
	金原茅子 (動員学徒)	昭和20年 1月7日、豊川工廠葬
焼津高裁	宮崎みつ江 機銃部 海軍軍属	
森高女	鈴木満貴子	昭和20年 8月7日、患者収容所へ移されたが病勢悪化、10日収容所で死亡。公務病死と認定されて後日、靖国神社に合祀されることになった。

読者の 声

私は職業上音楽に關係していたため、日本の作曲家には当然興味を持っていました。山田耕筰・信時潔・古関裕而など昔から私自身が親しみをもっていた作曲家が、太平洋戦争で日本人を鼓舞するような曲を作っていたことを後年知ることになります。戦後しばらくは軍歌が歌われなかったことが起因で思っています。

歌謡は作詞と作曲で成り立っています。戦時歌謡は戦いにおいて人びとを励まし勝利へ導く意図があります。さらに慰める内容も伴っています。しかし、私が注目したのは、「八絃一宇」「御稜威」(天皇の威光の意)などまるで馴染みのない言葉が出てきて、調べてみると戦前の我が国のことも、天皇に關係していることが多くうたわわっている事でした。

そして、かつての日本はます国があり天皇が居てその下で国民が生活しているというところがよく分かる内容で国民主権でないところが、しつかりとうたわわっているのです。まことに市民衆の憲法草案の内容に反動しています。

もう歌いたくない歌 — 山本 圭介 —

私も、今の市民衆案のようなものが通るなら、同様な心性を国民に植え付けることになりす。良くも悪くも音楽はそういう力を持っています。ともかく、戦時の歌を歌わずにすむ我が国の未来を思い、かつての軍歌を思い出して私たちが反省をするために載せることにしました。

戦時、作詞家たちは自発的に、又は強制的に戦争に協力する歌詞をつくり作曲家たちはその詞に相應のメロディーをつける努力をしたと思われる。皆さんご存知のように歌詞曲は売れなければ、また、それ以前に大勢の人に歌われなければ意味がありません。ですから、戦時歌謡も当然、国民に歌い易く覚えやすい、そして国のためになる歌を目指したのです。

音楽は人々に元気を与える役目をします。音楽にまるで興味のない人でも心の中に音楽が鳴る時もあるのではないのでしょうか。戦時の権力者たちは、そういつ、人の心を利用します。

この国にも戦時歌謡のようなものはあります。日本の物は「軍歌」として人々を元気に戦えるように作られているのは他の諸国と変わりありませんが、よく詞を読むと、天皇のため、国のために死をも厭われない内容が盛り込まれているのが特徴です。他の国では、そのような歌詞はあまり見当たらないように思われます。そのため、悲壮感の漂っている内容が多い。これは何故でしょうか。私も一言では言えません。「天皇のためには死も恐れない」などの言葉は、天皇のために進んで命を捧げるという気持ちです。